花は盛りに月は隈なきをのみ
見るものかは　『徒然草』より

田上　早百合

吉田兼好のこの一文は、軸装の「陰陽」、紬に書いた「家隆の和歌」にも通じる、この度の作品展での私のテーマです。

花と月をイメージして、段ボールを丸く切り、銀の岩彩を塗って、版画の要領で押し、下絵にしました。